

現代イギリス
女性作家を
読む

4

バーニス・ルーベンス

—Bernice Rubens—

■愛憎の迷路■

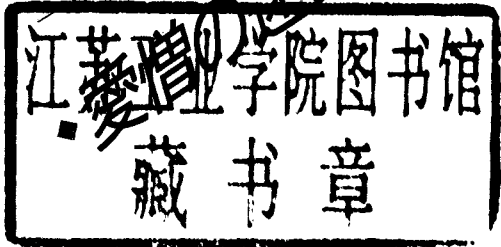
現代女性作家研究会 編

勁草書房

バーニス・ルーベンス

Bernice Rubens

迷路



勁草書房

バーニス・ルーベンス 愛憎の迷路

現代イギリス女
性作家を読む4

1992年3月30日 第1版第1刷発行

編 者 現代女性作家研究会

発行者 八 田 恒 平

発行所 株式会社 勁 草 書 房

112 東京都文京区後楽2-23-15 振替／東京5-175253

電話03-3814-6861(営業)／03-3815-5277(編集)

FAX 03-3814-6854

*落丁本・乱丁本はお取替いたします。

図書印刷・和田製本

*定価はカバーに表示してあります。

Printed in Japan

*無断で本書の全部又は一部の複写・複製を禁じます。

ISBN4-326-89880-1

はしがき

本シリーズでとりあげた五人の作家は、現在、イギリス文壇の最前線で活躍する女性たちである。女が「自分だけの部屋」をもてるようになった一九六〇年代以降、イギリスでも女性作家による自己表現がじつに多彩になった。それまで長いあいだ、社会的には家の中に囲い込まれ、精神的には自分の中に封じ込められ、「屋根裏の狂女」とならざるを得なかった女たちの「言いたい・書きたい」衝動が、おさえがたい創造のエネルギーとなり、時みちていっせいに花ひらいた感がある。

おしきせの「役割」や「神話」を脱ぎすて、女が自分の視点から現代を見つめるようになると、愛・孤独、結婚・家族、狂気・死など、文学の馴染みのテーマは思いもよらぬ新鮮な様相をみせるばかりか、妊娠・出産・性愛・レズビアンなど、これまで避けてきた女の性も、新たなテーマとしてクローズアップされた。すなわち女性作家の作品そのものを一つの契機として、トータルな人間としての女の生と性の意味が新たに問い直され、ひいては男女関係の力学から社会のあらゆる差別の構図までが明らかとなってきた。

一九八六年に始まった現代女性作家研究会では、七〇年代から八〇年代にわたり意欲的に作品を発

表しつづける最新の女性作家のほぼ全作品を読みながら、同時代に生きる女として、現代のさまざまな問題とともに考えてきた。毎年かわるがわる渡英するメンバーの情報と新聞・雑誌の書評をたよりに、これまでに読破した作家は一五人にのぼる。（これらは『現代イギリスの女性作家』『勦草書房、一九八六』ですでにとりあげたアイリス・マードック、ドリス・レスリング、エドナ・オブライエン、マーガレット・ドラブル以降の女性作家である。）その中からこのシリーズのために選りすぐったのが、フェイ・ウエルドン、アニタ・ブルックナー、P・D・ジェイムズ、バーニス・ルーベンス、アンジェラ・カーターの五人である。

選択の基準は、なによりもまず「へはなし」が面白いことにおいた。五人が五人とも、ストーリーの意外性とそのユニークな語り口で、読者をぞんぶんに楽しませてくれる。そしてつぎに、現代の男・女のセクシュアリティに新しい目が注がれていることが挙げられる。つまり社会的・文化的枠組みのなかに生きる女と男の関係性が、五人を並べみると、少しは立体的に見えてくる。P・D・ジェイムズの「推理小説」も、女の視点から見ると、意外にも現代を読むのに絶好の素材を提供している。そのジェイムズをのぞき、翻訳がまだ少ないのが残念だが、訳本がないものでも大筋がわかるよう配慮した。

このシリーズのために「特別インタビュー」をかってでたブラッドフォード大学のオルガ・ケニヨン、アンジェラ・カーターの「序章」を担当したケンブリッジ大学のキャスリーン・ウィーラー、恩師アニタ・ブルックナーとの会見記を「プロフィール」としてまとめた国際基督教大学助教授クレ

ア・ヒューズとの〈国際交流〉は、この企画が縁となって生まれたものである。本シリーズの特色の一つとなったのではないだろうか。

今なお執筆をつづける現代作家のことだから、資料の収集などについては不備な点があるかもしれないが、このシリーズが海外の新しい息吹を伝える一助ともなり、とりわけ文学の力を知る読者の共感を得ることができれば、それにまさる喜びはない。

一九九一年秋

鷺見 八重子

バーニス・ルーベンス 愛憎の迷路／目次



はしがき

序 魂の亡命者たち……………岡村 直美 1

第1章 『マダム・スザーツカ』……………伊藤 節 11

1 スザーツカを聴こう 11

2 ドレミファソラシドが回りつつける 15

3 ヴォクソール・マンシヨンズ一三二番地の協奏曲 18

4 スザーツカ・メソド 21

5 モーツァルトは駄目よ 23

6 上昇と下降とまた上昇 28

第2章 『選ばれし者』……………鈴木 和子 35

1 反精神医学を背景として 35

2 自立を阻んだ強い母 41

3 真実を見ない弱い父 46

4	母の代理、ベラ	50
---	---------	----

5	証言するエスタ	52
---	---------	----

6	選ばれし人々	55
---	--------	----

第3章	『わたしの晴れ着』	山田 晴子	61
-----	-----------	-------	----

1	わたしの物語	61
---	--------	----

2	女装でのデビュー	65
---	----------	----

3	エミリ・プライスの誕生と死	66
---	---------------	----

4	異性装嗜好（トランスヴェスティズム）	68
---	--------------------	----

5	父と息子	70
---	------	----

6	ジェンダーの中の「境界」	73
---	--------------	----

7	ジョージの復活	77
---	---------	----

第4章	『あのひとに手紙を出した』	岡村 直美	81
-----	---------------	-------	----

1	ロック飴の唄	81
---	--------	----

2 テディ・ベアの嘆き 86

3 パリ製婦人用ズボンの夢 90

4 ほどけた赤いリボンの現実 96

第5章 『ボンソンビイ・ポスト』……………山内 照子 105

1 分断の構図 105

2 見せかけだけの絆 110

3 小さな素足の連絡員 115

4 満月の夜の集結 119

第6章 『五年分の日記帳』……………武井 誠子 129

1 定年退職 129

2 新しい命令 133

3 命令の実行 136

4 結婚への投資 139

5	ウェディングドレス	143
6	虹色のスカーフ	148

第7章	『スプリング・ソナタ』		宮澤 邦子	153
-----	-------------	-------	-------	-----

1	「生まれたくない」——物語のあらすじ	153
2	「一語一句まで真実です」——語り手の枠組	158
3	「お母さんのようにはなりたくない」——母性の問題	162
4	「天国にいるみたいだ」——音楽の美	169

第8章	『ウェイクフィールド氏の使命』		山内 照子	177
-----	-----------------	-------	-------	-----

1	出されなかった手紙	177
2	青い封筒のエアメール	184
3	亡き妻への手紙	192

第9章	『われらの父よ』		鷺見八重子	197
-----	----------	-------	-------	-----

1	砂漠と神	197
---	------	-----

2 公園と乳母車 203

3 キジ鳩とそよ風 210

第10章 『独りぼっちの悲しみ』……………窪田 憲子 219

1 墓場の花盗っ人 219

2 地下の国の徘徊 222

3 ピンクのギンガムドレス 226

4 運命の日 234

5 父性の幻につぶされて 238

終章 特別インタビュー……………オルガ・ケニヨン 245

山内 照子訳

あとがき…………… 261

参考文献

索引

序 魂の亡命者たち

岡村 直美

「わたしはどうすればいいのでしょうか」とレオンは聞いた。

役人は肩をすくめて、答えた。「もと居たところに戻れ、そして正当な書類を整えてくるのだ」(バ

ーニス・ルーベンス『同胞』第二卷一〇章)

帝政ロシア時代、オデッサのユダヤ人虐殺(一八七一年)で生き残り、かすかなつてを頼ってイギリスへ亡命しようと、はるばる陸路をドイツのハンブルグ港までやってきた『同胞』(一九八三)のユダヤ人、ビンデル家三代目の兄弟は、乗船の時にはぐれて、イギリスとドイツに別れ別れに暮らす運命となる。弟のレオンが役人の気まぐれで、はじめから所持していないパスポートの提示を求められ、乗船を拒否されたからだ。役人の言い分は正しい。だが、「もと居たところ」へ戻れないから、「正当

な書類」を整えることができないから、苦勞を重ねてここまでやってきたのだし、船にも乗って逃れたいのだ。役人の言葉は、亡命者たちにとって最も無意味で苛酷なものである。

バーニス・ルーベンスは一九六〇年に第一作『いがみ合い』で、未亡人となった母を助け、四人の弟妹を育てあげて家に残った長女グラディスに焦点をあてた、ユダヤ人一家の物語を発表する。以来、祖国や社会や家族や、ときには自分自身にすら否定され、愛されず、無視されて孤独に生きる人びとを描くことで、独自の文学世界を作りだしてきた。これらの人びとのなかには、実際の政治的な亡命者もいる。しかし大部分はまわりの環境からはみだし、受け入れてもらえない、変人・独身や未亡人の老女・精神分裂病患者・麻薬中毒者・異性装嗜好者・同性愛者・殺人者などに姿を変えた、魂の亡命者たちである。かれらはみなレオンのように、自分の身をどう処したらいいのか、その答えに窮している。だが、一般世界の常識やありかたに合わせた生き方ができるような「正常な」人間にはなれないし、あるいは、なりたくないのである。ルーベンスは、このようなはみだしもので、身も心も傷ついた亡命者たちの、いわば〈病歴〉（ケース・ヒストリー）でもある魂の歴史を、あるがままに、だが、深い同情と暖かい理解をもって描いている。冒頭に掲げた『同胞』からの引用は、ルーベンスの文学全体を総括しているといっても過言ではない。

「わたしの全人生と全作品において最大の利点となったのは、自分がユダヤ系であるという事実です」(1)とルーベンスが語っているように、作家自身が政治的な亡命者の一族であることは、社会に受け入れられない弱者たちへ思いをはせ、あるいは、孤独のなかに沈潜しながらも自らの本質に迫り、

他者も自己も理解できる感性を研ぎすますチャンスに恵まれていたことを示している。このことは、文学風土は異なるものの、ルーベンスと同じようにユダヤ系女性作家でブッカー賞を受けたアニタ・ブルックナー（一九二八―）や、一九九一年度のノーベル文学賞を受賞した、南アフリカ連邦のナディン・ゴードイマ（一九三―）の二人にも言えることである。

また、西インド諸島ドミニカ出身のジーン・リース（一八九四―一九七九）に、ルーベンスは深い尊敬の念を抱いている。リースの最晩年の三年間を、ルーベンスは親しく知っていた。父がウェールズ出身の医者で母がイギリス系クレオールだったリースも、一六歳で単身イギリスに移住する。父の死で自活の道に入ってから、物質的にも精神的にも亡命者の生活の中で、文学の花を開かせた。自伝的な要素の強いヒロインたちの放浪の生活を中心テーマにとりあげたリースと、暖かい理解を示しながらも、登場人物たちと距離を置いたクールな目で描くルーベンスとは、かなり作風を異にするが、ともに魂の亡命者たちへの深い共感が根底にある。

バーニス・ルース・ルーベンスは、一九二八年七月二六日にイギリスのウェールズ地方カーディフに生まれた。四人きょうだい（姉ベリル、兄ハロルドと弟シリル）の三番目である。父イーライは、亡命してウェールズに定住した、ロシアのリトアニア地方（当時）出身者で、母の名はドロシイ。二人とも生粋の正統ユダヤ系であることを誇りとしていた。父がイギリスへやってきた経緯は、『同胞』のレオンと別れた兄アロンさながらである。ハンブルグで乗船したときには言葉が理解できなかった。なので、ニューヨークに行くつもりが、切符売りにだまされた。それで、カーディフに到着後一週間

ほどはニューヨークだとばかり思っていたという（アーロンの場合は、最初からイギリスが目的地だった。またアーロンのように、父はウェールズ地方の谷間に点在する炭鉱町をまわって衣類や生地を売る分割払の商人から始め、やがて生地屋として独立して懸命に働いた。母も家に下宿人を置くなど、一家は裕福にはほど遠かったが、バーニス自身は「ひもじかったことも貧乏だとも意識したこともなかった」⁽²⁾と語っている。だが、姉とともに通っていた学校時代、どちらかが制服の帽子をなくしたが、新たに買えなかったもので、時間をずらせて登校し、二人でひとつでなんとか間に合わせた、というユーモラスなエピソードも披露する。兄ハロルドの代になって苗字のルーベンスの綴りを英語風に変え、バーニスもそれになった。

自分のアイデンティティを決して忘れたことのなかった父は、一家の生活信条の第一優先順位にユダヤ民族であることをあげ、第二次世界大戦直前には、オーストリアやドイツから逃げてきた多くのユダヤ人たちに家を解放した。両親の同胞愛の強さは、ウィーンから疎開してきた少年を五年間ほど里子として引きとったほどで、ニューヨークに在住する彼は、いまだにルーベンスたちとはきょうだいとしてつきあっているという。また終戦直後、ナチスの強制収容所の実態が連合国側にあきらかになったとき、生存者たちに送る衣料の救援物資をカーディフ中から集め、その物資の集荷所に家を提供したりして、同胞のために献身した。

日々の生活や同胞への福祉活動にいそしむ両親が多忙だったため、かえってきょうだいは、自分で自分の人生を作りあげる自由が与えられ、また互いの絆が強いものになったという。作家自身が最も